PRESS RELEASE

〈報道関係各位〉

YURINDO

2023 年 11 月 29 日

株式会社有隣堂

『古典落語　面白キャラの味わい方』（有隣堂刊）刊行記念企画

立川談慶師匠　トーク&サイン会　イベントレポート

11月15日 紀伊國屋書店新宿本店で満席のなか開催

株式会社有隣堂（本社：神奈川県横浜市 代表取締役社長：松信 健太郎）は、10月30日発売『古典落語 面白キャラの味わい方』の刊行記念企画として、11月15日(水)に、紀伊國屋書店新宿本店で、著者の落語家・立川流真打の立川談慶氏のトーク＆サイン会イベントを開催しました。満席のなか、立川小春志氏をゲストに迎え、ふたりの落語家としての向き合い方や、『古典落語　面白キャラの味わい方』の解釈などが語られました。今回は、その模様を本書の編集担当のレポートとしてお届けいたします。

■イベント概要

・名称：立川談慶師匠
　　『古典落語 面白キャラの味わい方』
　　刊行記念トーク&サイン会
・ゲスト: 立川小春志
・開催日：2023年11月15日(水)
・会場：紀伊國屋書店新宿本店　9 階イベントスペース

立川小春志氏（左）と立川談慶氏（右）

イベントレポート

紀伊國屋書店新宿本店４階の紀伊國屋ホールでは、先月 700 回を迎えた「紀伊國屋寄席」が毎月催されている。落語文化の一角を担ってきた伝統の書店で、立川談慶師匠の新刊イベントが開催された。
『古典落語　面白キャラの味わい方』（小社刊）は、ともすれば噺（演目）ごとの解説になりがちなところを、「登場人物ごと」に項目立てし、読み解くことに挑戦した野心作だ。トークのお相手は、立川流の“妹弟子”であり、真打披露を終えたばかりの立川小春志師匠。用意された 30 席は満席、トークの冒頭から、参加のみなさんの真剣な眼差しが壇上に注がれた。

◎「聞きたいことが山ほどある」と談慶師匠

イベントの冒頭から、著者であり主役の談慶師匠から、小春志師匠に質問の嵐。「落語に触れたきっかけは？」「なぜ談春あにさんに入門したの？」「好きな落語は？」と立て続けの問いに、小春志師匠が丁寧に回答していく。談慶師匠は、談志門下の兄弟子で、立川流でもっとも厳しいといわれる立川談春師匠に、女性ながら一番弟子として入門、見事に真打昇進を果たした小春志師匠のこれまでの経験を知りたかったらしい。特に「女性ならではの前座修業の大変さ」「女性が演じる場合に気を付けていること」などは、男性から見て気になるところ。しかし修業時代から「女性だから」という特別扱いはなく、「ひと昔前と違って、お客様も落語界もずいぶん意識が変わっていますよ」と小春志師匠。
談慶師匠も「そうか、女性がどうこうという自体が固定観念なんだ。初めて落語を聞く人が女性落語家を聞けば、それがスタンダードになるわけだから。固定観念は、後付けの『とらわれ』によって決まるものなんだなあ」と感心しきりだった。

◎「文七元結」の物語を動かしたのは、女将の「嫉妬」

『古典落語　面白キャラの味わい方』の感想として、小春志師匠がトップに挙げたのが、「第四章　女性たちのしなやかと賢さ」の「佐野槌の女将」で指摘された「佐野槌の女将の嫉妬を起点に話が転がり出す」の一節だった。

「文七元結」は、博打に明け暮れる左官の長兵衛の娘お久が、父の借金の肩代わりのため自ら吉原の大店「佐野槌に赴き、身を売ろうとするところからストーリーが動き出す。佐野槌の女将は長兵衛を呼び出し、「娘をうちで預かるかわりに 50 両を貸そう。しかし返済期限に少しでも遅れたら鬼になるよ。お久に客をとらせるよ」と言い含めるのだ。

純真無垢なお久に女将がほだされたとするのがよくある見方だが、それを談慶師匠は女将のお久への「嫉妬」だと解説する。自分は 16 歳の時に父親に売られて吉原に来た。この世界で汚れながら生き抜き、女将にまでなった。吉原に身を沈めてまで立ち直らせたい父親がいるお久と、その一途さへの嫉妬が、女将にあの行動をとらせたのではないか。

「これを嫉妬と見るあたり、談慶師匠は女性以上に女性のことがよくお分かりですね」とは、小春志師匠のコメントだ。

◎「落語キャラを解釈し、理解する上でのヒントがある」

入門前は、大学院で昆虫学の研究者だった小春志師匠は、昆虫の世界も人間の世界も「コミュニティ論」で成り立っているという。現在ではなくなったが、つい 30～40 年前は、「結婚するのに家同士の格が」とか、地主と小作の上下関係とか、家長（父）には絶対服従とか、それが当たり前のように日本社会に残っていた。今はみな平等が建前だが、コミュニティに生きる以上、差別はいけないが「区別」は存在すると小春志師匠は語る。

「落語のキャラを見るときに、彼らがどういうコミュニティを背景に持つかを考えて楽しんでほしいと思います。職人には職人の、商人には商人のバックグラウンドがあるんです。それを踏まえて今回の本を読むと、各キャラクターを解釈し、理解する上ですごくヒントになると思います」小春志師匠の言葉に、「落語のキャラには本当はモデルになる人が実在していて、その行動を活写したうえで、端的な性格を与えてフィクションに落とし込んだのかもしれない。そんな仮説から彼らの原点を辿るつもりで書いたので、「うれしい感想ですね」と談慶師匠が応じる。

盛り上がった対談はいつのまにか予定の時間をオーバーし、終わると熱のこもった大きな拍手が沸き起こった。トーク終了後のサイン会では、本の前と後ろの見返しに両師匠がサイン、記念の 3 ショットも OK ということで参加のみなさんも大満足。今日は高座がなかったので、「今度は落語を聴きに行きます」という方々もいて、ファンも増えた様子である。紀伊國屋書店のイベント担当の方も、「またやりたいですね」と満足そうだった。

ふたりの師匠の間に立って記念撮影する編集担当

レポート：『古典落語　面白キャラの味わい方』編集担当 根本騎兄

■**12月26日(火) 開催 「『古典落語　面白キャラの味わい方』刊行記念　立川談慶独演会」**詳細はこちらまで

ニュースリリース：https://www.yurindo.co.jp/corporate/norm_info/11321/

横浜にぎわい座 HP：https://nigiwaiza.yafjp.org/perform/archives/27066

■**書籍情報**：https://www.yurindo.co.jp/yurin/tanko/32757